

平日の昼前。駅のホームにほとんど人はいない。いるのは私と両親だけだ。でも本来は兄も呼ばれていたはずだった。

「やはり来ないか……」

父は肩を落とすが、少しでも期待している方が間違っている。兄は食卓にすら出てこないのだ。別に私は引き籠りの兄を責める気はなかった。外に出たくない気持ちは良く分かるし、この両親と顔を合わせたくない気持ちも分からなくもない。しかし、今駅に立っているこの状況が、兄が原因だと考えると些か頭も痛くなるというものだ。

「まあ来ない奴のことはいい、ちゃんと持ち物は持ったか？」

持った。両親の目の前で下された私のなけなしの貯金。もう一度言う。私のお金だ。それとタオル、水筒などの日常雑貨の入ったリュック。

ちよつと出かけて来るには少し大げさな持ち物だろう。しかしひと月の旅の支度としては不安が残るかもしれない。そんな荷物だ。

そして何が問題かと言えば、比喻でも何でもなくこれから一か月、これだけの荷物で放浪しなくてはいけないことだ。

「上のを育てた時に俺は不安でいっぱいだった。車に轢かれるかもしれない。川に落ちるかもしれない。その結果があれだ。だから決めた。次に子供が生まれたら十一歳の夏に思い切り外へ出そう、と」

父は断言で母は続いて頷く。

ああ可哀想な兄。引き籠りの兄。

幼い頃の環境で外への耐性を失くしてしまった兄。

ネトゲを始めたら学校へ行く日が減っていき、やがて籠りつきりになってしまった兄。

食事に呼んでも来なくせに宅配の声にだけは嬉しそうに出てくる兄。

そして、そのせいで折角の夏休みに全財産を下ろす可哀想な私。

『1番線のホームに電車が参ります。危ないので白線の内側に下がって離れてお待ちください』

予定時刻通りに電車がやってくる。ここで嫌がっても仕方ないことを私は知っていた。両親が納得しない。引くにしろ進むにしろ私はこれに乗るしかないのだ。

「これから一か月、恐らく大変なことがいっぱいあるだろう。泊まる場所の確保。ご飯だってそのくらいのお金じゃあ足りないかも知れない。でも全てそれは体験だ。これから六十年、七十年人生

は続くだろう。そのあらゆる時間でそれが生きてくるはずだ。辛いことも楽しいことも全て受け止めて——無事に家に持ち帰って来い」

私は父の目を見て黙って頷く。そして少し頼りない荷物と、とても頼りない我が身を抱え電車へと乗り込んだ。

『まもなく発車致します。閉まるドアにご注意ください——』

こちらの心情とは裏腹に、電車はいつも通りに動きだし、やがて街を離れて行った。

今頃父は後悔をしているのだろうか？ 兄の時もそうだったが父はいつだって気付くのが遅いのだ。墓に入る前にその性格に気付いてくれることを願うばかりだ。

もちろん人のことを心配している余裕はない。私は自分を勇気づける。

「大丈夫……いつも通りの短い夏休みが始まったただけだから……」

七月二四日出発。大丈夫。ひと月後にはいつも通りに宿題に追われる日常があるだけだ。一人で暮らすのが何だ？ 兄は元より私は普段から両親にだってそこまで頼ってはいなかったはずだ。両親はまだ私を頼りない子ども扱いするけど、私は彼らが思っているよりずっとしっかりしているつもりだ。大丈夫。

そうこう考えてる間に電車は次の駅に着き——私は躊躇うことなくそこで降りた。



最寄駅から一駅離れた見慣れた駅。自宅から自転車で三十分くらいだろうか？そこから更に十分ほど歩くと、友達の家がある。他のクラスメイトと比べてやや家は遠いが、私は彼女と仲が良く比較的よく遊びに来ていた。慣れた手つきでインターホンを押す。

「あ、いらっしやーい。思ったより早かったね」

「お父さんが『早く出発しないと初日の宿探しは大変だろうからな』って……ごめん、迷惑だった？」

「ううん、別にいつだって問題ないよ。まー玄関で話すのもなんだし中入っちゃって」
「うん、お邪魔します」

友人は少し渋い顔をする

「そこは『お邪魔します』じゃなくて、『ただいま』でしょ」

「……初日だし、お邪魔しますで良いと思うんだけど」

「え……んー、お約束として言っておこうかなって」

まあこれから一か月厄介になるのだ。ただいまの練習くらいはしても良いかもしれない。

「じゃあ、ただいま」

「はい、いらっしやい」

おかえりと言わない友人は意地悪な笑みを浮かべ、私も苦笑いをしつつ中に続いた。



「でもあたしは勿体ないと思っちゃうなー。だって一人旅なんて楽しそうじゃない？ 誰からも何も言われず好きなところへ一か月も！ あ、でもお巡りさんには何か言われるかも」

ここに来てからはや二週間が経ち、自宅にいるのと変わらず暇を持て余し、二人して部屋で遊んでいると、これで三度目かくらいの同じ話を振られる。友人は正直な感想を言っているのだろうし、実際彼女は同じ状況になったらそう思うと思う。私と違ってロマンチストなのだ。

「そうはいうけど、私の全財産なんて所詮お小遣いの寄せ集めだよ？ 行けても精々二つ先の県程度。しかも宿代食事代入れたら、とてもそんな遠出も出来ない。知らない街で遊ぶ場所見つけてもお金

がなくて遊べない。準備のない旅行なんて悲惨なだけじゃない」

夏休み前、その旅の話をしたとき友人は『だったらうちに来ようよ！泊めてあげるから』と言ったときは流石に彼女の親が許さないだろうと思っていたのだが、事はあっさりと進んで行く。後日彼女の母から連絡が入り、大した生活費は払えないけどそれで良いんですか、と聞くと。

「それっぽっちお金じゃ全然足りない。欲しくもない。だから代金の代わりに『一か月しつかり我が家の娘として生活する』という労働をさせてあげるわ」

要するにただで泊めてくれたわけだ。少々変わっているが良い人だと思う。もちろん何もせずに泊まれるほど凶太くもないので、積極的に家事を手伝わせてはもらっている。

おかげで貯金はほぼそのままの額で手元に残っているが、別段使う理由も見つからず、毎日のんびりと過ごした。

ただ唯一宿題と呼べるようなものとして、両親への思い出話の捏造をしなくてはいけない。友人に協力してもらい、旅行雑誌を眺めながらあれこれ議論した。

「あ、この観光名所の話したらうけるんじゃない？」

「うーん、距離的にどうだろ？もつと近場から攻めないと言説得力が――」

とはいえ我が家族は疑うことが苦手なので、そんなに難しいことでもなく、旅行日誌はやがて壮

大な冒険譚へと変わっていった。

見知らぬ人を助けたと思っただら宿屋の主人で、定食屋で意気投合した人はフェリーの乗組員だ。出会う人はみんな私を助けてくれるし、質素な生活でもどこまでだって行ける。

そんなこんなで予定通り私の波乱の夏休みは、平凡にあつという間に過ぎて行った。



八月二五日。一か月ぶりの帰宅。

帰りは友人の母が近くまで車で送ってくれたので、歩いたのは一分程度だが、久々の家は感慨深く遠い道のりだったように感じなくもない。いや、気のせいかな。

家に入ると両親がバタバタと出迎えてくれた。母は涙し父も目が潤んでいる。私が楽しく驚きの旅を考えている間に、両親は辛く厳しい旅を想像していたのだろう。自分たちで送り出しておいて勝手なものである。

父は私の顔をまじまじと見つめて満足そうに呟く。

「ひと月前とは別人のようだ……遅しくなったな」

彼はいつだって気付くのが遅いのだ。

そんなに心配しなくても、あなたの娘はそれなりに逞しく生きているから大丈夫。実際私が、涙する両親の横で考えていたのはなんてことはない、浮いた貯金の使い道だったりするのだから。

何に使うか……そうだ、冬休みは友人と一緒に、今度こそ本当に旅行に行くのも悪くないかもしれない。

もちろん次はしっかりと計画を立ててからね。

あとがき

冒険って人伝に聞いたり、自分で後で思い返すと凄い事のようにだけど、案外その最中は、大したことないように感じてしまうものなんじゃないかと思っています。『体験』を『冒険』に変えるのは、いつだって語り部じゃないかと言う話。

こんなギリギリに投稿したのに、読んで下さった方ありがとうございます。ちよつと変わった作風の長い話が間に合いそうもなく、いつも通りの作風の短い話でした。十一歳の少女が旅に出される。ようするにポ○モンですね。それ。

ルフでした。